

祭礼空間を語ることばとジェスチャー – 水窪町西浦田楽別当の語り –

absolute gesture frame of reference in the storytelling of a Japanese traditional festival, Nishiure Dengaku

細馬宏通 (滋賀県立大学人間文化学部)

Abstract: In Japan, it is not popular to refer ordinary things with absolute linguistic frame of reference nowadays, though the absolute direction system is still important in the traditional culture. To research how the frames of references are used in the traditional culture, speech and gesture analysis was done for the stories told by the master of a Japanese traditional festival Nishiure Dengaku. The master did not use absolute linguistic frame of references, but the analysis revealed that he used absolute gesture frames for the same stories told from different directions, referring the knowledge of the festival.

1. はじめに

1.1 参照枠における絶対枠と相対枠

ヒトが空間認知を行うときの位置枠組みは、参照枠 reference frame, frames of reference と呼ばれている。ことばやジェスチャーの連鎖によって空間配置や移動が表現されるとき、これらの表現から位置表象を抽出し、参照枠を推測することができる。

語者が第三者の位置を語るとき、参照枠は大きく「絶対枠」と「相対枠」の二つに分かれることが指摘されている(井上 1998)。従来、両者の差は、言語レベルでは「東西南北」の方位を用いる(絶対枠)か、「左右」のような話者の向きによって変化する方角を用いるか(相対枠)によって区別されてきた。

東西南北以外の土地環境に依存した絶対枠も知られている。たとえば傾斜地に居住するテネハ族では、傾斜の「上下」によって方位を表象する(Levinson 1994)。

1.2 言語を介さずに表れる絶対枠

言語を介さない表象の場合、絶対枠と相対枠の区別は言語の場合ほど自明ではない。たとえば、「AとB」と言いながら、目の前にある事物Aから事物Bに指さしを移動させたとしよう。このとき、指さしの動きは、物理空間の東西南北と一致しているが、それは目の前の環境要因を手がかりに指さしを行った結果に過ぎないかもしれず、話者の認知が絶対枠をとったかどうかは明らかではない。

また、目の前にない事物に対して「AとB」と指さしを移動させ、その東西南北が現実のAとBの東西南北と一致したとしても、それは単なる偶然の可能性もある。

言語以外の表現が絶対枠をとるかどうかを検証するには、話者の向きの変化にかかわらずその表現の東西南北が不変であることを検証するとよい。

たとえば Levinson (1996)や井上(1998)は、被験者に一列に並んだ模型を見せた後、被験者の向きを 180 度回転させて模型の配置を再生させることで、絶対枠/相対枠いずれを取るかには個人差や文化差があることを検証している。

ジェスチャーに注目する先駆的研究としては Haviland (1993, 2000) のグウグ・イミディールにおけるフィールド観察がある。語り部は近くの川で起こったボートの転覆を二年を隔てて二度語るのだが、この二回では座る方向が 90 度異なるにも関わらず、転覆を表象する手の動きの方位が保存されていることが観察された。しかも、語り部は「東西南北」を現すことばを使っていない。

以上の事例から、絶対枠は、単に「東西南北」のような方位概念によって構成されるだけでなく、語り手・語り手の環境要因・語りに表れる事象の間に構成されることがわかる。また、こうした参照枠は、必ずしも言語レベルでは観測できない場合があることもわかる。

1.3 祭礼空間とジェスチャー、参照枠

日本においては、十二支による方位表現や「鬼門」や「恵方」といった単語に表れているように、古来、方位という絶対枠は重要な概念として言語化されてきた。しかし井上(1998)によれば、身の回りのものに絶対枠に基づく表現を使うことは、現在ではほとんどなくなっているという。

では、古来の方位に大きく依存する祭礼空間をめぐる語りでは、どのような参照枠がとられているだろうか。また、そうした参照枠は、言語レベルに依存するものだろうか。

本論では、日本古来の祭礼のひとつ、静岡県水窪町西浦地区の「西浦田楽(観音様の祭り)」の調査結果の中から、この祭礼空間の進行を語る語りに注目し、言語内容に表れない情報がジェスチャーによってどのように表象されているかを検討する。さらに、語り手のジェスチャーが、相対枠、絶対枠のいずれを構成しているのかを検証する。

2. 祭礼空間の語りの分析

2.1 発語内容に表れる祭礼

以下は、「観音様の祭り（西浦田楽）」の中心人物の一人である別当(B)への聞き取り調査の中で、別当が調査者(F)に対して、祭礼の概要を説明する語りである。聞き取りの場所は別当宅で、祭礼の行われる観音堂境内から石段を下りたすぐ南側に位置している(図1)。

この祭りは毎年旧暦の一月一八日、月の出に始まり、夜を徹して行われ、日の出とともに神をしずめて終わる。祭りはいくつかの儀式と、地能・はね能という舞いによって構成されており、舞いは舞い庭(図1)で舞われる。

この語りでは、祭りの最初から中盤までの進行が語られている。

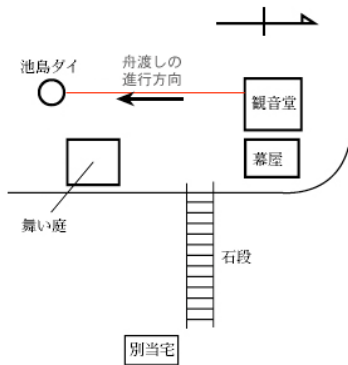


図1 祭礼の行われる境内の諸要素と別当宅との位置関係
(語りに登場しない要素を一部省略してある)

語り 1

B「やっぱりあの、庭をほめて、そして庭にカミムロをつくる。で、注連縄(しめなわ)をはる。そいで、その中の悪霊をはらう。で槍でこう突く。ほいで、空中をはらう。そ、それによってもって今度は、タイマツ、あのう、池島ダイちゅうてあの、立ってるところへ、ショウミョウですよ、ありゃあしょう、今は照明っていうんですが灯明(とうみょう)なんですよ。すると舞い庭をこう、明るくして。」

ここでは、祭礼の場における4つの場の要素、すなわち「(舞い)庭」「カミムロ」「注連縄」「タイマツ」の存在が明らかにされている。また、祭礼の内容(庭をほめる・カミムロを作る・注連縄を張る・悪霊をはらう・槍で突く・空中ではらう・庭を明るくする)も明らかにされている。さらに、語りには時系列情報も含まれている。各儀式や舞いは、この語りと同じ順番で行われるであろうことも分かる。

しかし、ことばの内容を見る限り、各要素や儀式の位置関係は分からない。また、この語りの後半では、「タイマツ」の説明が行われているのだが、ことばの内容を見る限り、それは「池島ダイ」「ショウミョウ」「照明」「灯明」という、4つの単語への言い直しに過ぎず、「立ってるところへ」ということばは途中で途切れている。

2.2 発語-ジェスチャーで表現される祭礼空間

しかし、この語りの発語に伴っているジェスチャーに注目すると、この語りでは、祭礼の要素と儀式の位置関係が表現されていることがわかる。

まず「庭にカミムロをつくる」という発語には、左手を水平に置き(図2左)、そのあと、両手で器の形を作るジェスチャー(図2右)が伴っている。このことから、庭全体がひとつの「カミムロ」となることが示唆されている。

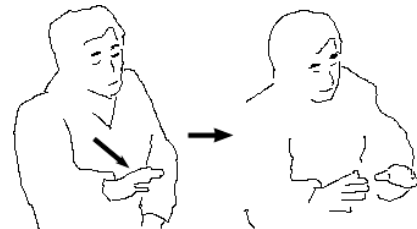


図2 「庭に」(左)「カミムロをつくる」(右)という発語に伴ったジェスチャー

また、「注連縄をはる」には図3のように、器の形を作った左手の形と位置が保たれたまま、その上部を広げた右手が図2bで示された器の縁に沿って丸く動いている。このことから、注連縄はカミムロの輪郭に沿って張られていることがわかる。「悪霊をはらう(手前から前方へ右手移動)」「槍で突く(両手で槍を持ちカミムロに向ける)」「空中をはらう(カミムロ上を水平に往復)」も同様にカミムロ上で行われることがジェスチャーで示される。



図3 「注連縄をはる」という発語に伴ったジェスチャー

2.3 発語のやり直しに伴うジェスチャーの方向転換

語り1の後半、一連の単語の言い直しに伴うジェスチャーに注目すると、最初の言い直し(「たいまつ」→「池島ダイ」)の前後で、ジェスチャーが突然、方向転換されていることがわかる(語り1-1)。

語り 1-1

B: 別当、F: 調査者

() : 沈黙長 (単位 : 秒)

{ } : 発語もしくは沈黙と同時に行われたジェスチャー

B: それによってもって今度は ; {a}

B: たいまつ ; {b}

B: あのう ; {c:*方向転換}

(1.7s) ; {d}

B: 池島ダイちゅうて {e*方向転換}

B: あの立ってるところへ {f}

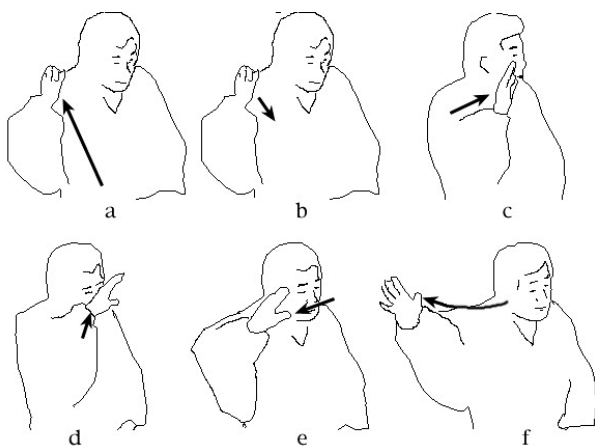


図4 語り 1-1 に伴ったジェスチャー

a から b にかけて、振り上げられた右手は、開きながら前方下に向かう (図 4a, b)。ところがその直後、右手と顔の向きはとつぜん左に向かう (図 4c)。ここで発語はいったん中断し、沈黙のあいだ、顔は再び正面を向き、目は閉じられ、右手はその目の前で微かに水平に揺らされる (図 4d)。沈黙の後、右手は再び右に方向転換し、図 4e から f にかけて大きく右外側に移動する (図 4e, f)。

図 4d の手の位置は、額の近くに手をかざしてものを思い出すという「想起」のエンブレムにも見える。しかしそうだとするならば、c で顔を左に向ける理由が理解できない。語り手は、顔を正面を向けたまま、目を閉じ、右手をかざせばよかつたはずである。

2.4 祭礼空間の知識とジェスチャー

図 4c におけるジェスチャーの方向転換は、じつはこの「観音様の祭り」における儀式を知ることによって理解可能になる。

この祭りでは、語り例 1 の前半で語られている「注連縄を張る」「悪霊をはらう」「槍で突く」「空中ではらう」

などの儀式のあとに、「舟渡し」と呼ばれる、重要な儀式が行われる。

「舟渡し」とは、観音堂にある観音様の灯明の火を、池島ダイという数メートルの巨大なタイマツまで移すという儀式である。綱にくくりつけられた舟形の上に火を乗せ、能衆たちが綱を操作しながら火を移動させることから、この名がついている。このタイマツは朝まで燃やされ、以後の祭りでは舞い庭は明るく照らされる。

「観音様の祭り」における舞い庭・池島ダイ・観音堂の位置関係は図 1 のようになっている。図 1 と語り手のジェスチャーに表れた舞い庭 (図 2)・池島ダイ (図 4a, e) の位置とを対応させると、語り手のジェスチャー空間では、観音堂はちょうど語り手の左に位置することが分かる。すなわち、図 4c での顔の向きは、ちょうど観音堂の位置を見ており、図 4d, e における左から右への右手の移動は、舟渡しの火の軌跡を描いていることになる。「舟渡し」ということば自体は語りには登場しないが、ジェスチャーには、この言語化されない儀式が表れているのである。

こう考えるならば、「立ってるところへ」(図 4f) という、続きの不明瞭な発語の意味も理解できる。つまり、この発語とともにジェスチャーは「立っているところへ」舟と火が渡されたことを示しているのである。

以上の考察は、語り 1-1 に続くさらに後の部分 (語り 1-2) でも確かめられる。

語り 1-2

B: すると舞い庭をこう

B: あかるくして

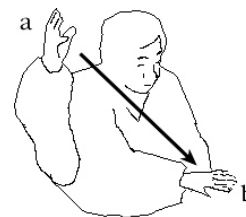


図5 語り 1-2 に伴ったジェスチャー

「すると舞い庭をこう」という発語とともに、右手は右外側の高い位置から (図 5a) 正面前方に向かって振り下ろされている (図 5b)。このジェスチャーの起点と終点は、池島ダイと舞い庭の位置関係に相当し、また、その軌跡は、池島ダイの光が舞い庭を明るくする方向に相当する。つまり、この時点で、「舟渡し」は行われた後で、池島ダイに火がついていることがわかる。

このジェスチャーからは、図 4b の動きも理解可能になる。「たいまつ」という発語とともに前方下に振り下ろされた手は、ちょうど図 6 の a から b への動きを中断し

た形になっている。つまり、図 4b から c へのとつぜんの方向転換は、火のついたタイマツを表象しようとして、それをいったん中断し、「舟渡し」の儀式を挿入するジェスチャーであると解釈できるのである。

2.5 絶対枠の検証

語り 1 で、語り手は東を向いて座っており、ジェスチャーにおける事物の配置は、じっさいの祭礼空間と東西南北が一致している。この一致は単なる偶然だろうか、それとも語り手が絶対枠によって語った結果だろうか。このことを検証するために、この語りから 19 日後に、再び同じ語り手に祭礼の概要を語ってもらった。ただし、聞き取りにあたって、「前回と雰囲気を変えるため」語り手の座る位置を時計方向に 90 度変え、南を向いて座ってもらった。

語り 2

B: 別当、H: 調査者

{}: 発語もしくは沈黙と同時に行われたジェスチャー

B: 観音堂の火を {図 6a}

B: もってきて {図 6b}

H: ええ

B: 点火して {図 6c}

H: ええ

B: それが {図 6d}

B: 灯明の {図 6e}

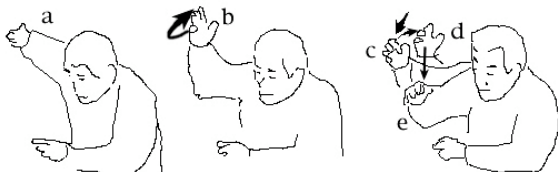


図6 語り1-2に伴ったジェスチャー

まず、「観音堂の火を」という発語とともに、右手は右肩よりも後方を指している(図 6a)。その後、「もってきて」で、前方にすばやく移動しながら振り上げられ(図 6b)、「点火して」でさらに前方に移動し(図 6c)、「それが」「灯明の」で、内側に向けてに振り上げられてから下ろされる(図 6d, e)

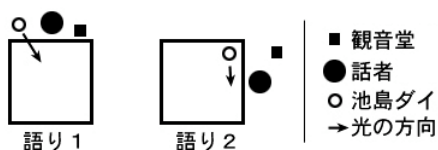


図7 語り1・語り2のジェスチャーにおける各要素の配置

つまり、語り 2 では、観音堂は話者の右後方に、灯明(池島ダイ)は右前方上に、灯明が照らす対象は前方に表象されているのである(図 7 中央)。これは、語り 1 で表象された向き(図 7 左)と対応する。話者の向きは時計方向に 90 度回転しているにもかかわらず、各要素間の配置は回転していない。

すなわち、時間を隔てて語られた語り 1・語り 2の間では、絶対枠が取られており、それは話者の身体方向の変化にもかかわらず安定していたことがわかる。Haviland(1993)の観察したグウグ・イミディール族のジェスチャーと同じような現象がここでも観察されているのである。

3. 考察

グウグ・イミディール族(Haviland, 1993)の場合とは異なり、西浦地区の人々の語彙には「東西南北」が存在し、また、川の上流下流に対応する「上(かみ)」「下(しも)」という表現も存在する。日常用語の中には絶対枠表現が複数存在し、また、説明を求められれば、西浦の人々は身近な事物の東西南北を的確に言い当てる。

また、祭礼に使われる事物には「北ダイ」「南ダイ」のように方位を含むものもある。ただし、これらの「北」「南」は、タイマツ自体の方位を指すのではなく、タイマツの薪を提供する地区の方位を指す。

ここで取り上げた別当の語りには、「東西南北」「上下」のような絶対枠を示すことばは含まれておらず、ことばのみからは事物の位置関係は明らかではなかった。また、この別当の語りに限らず、他の能衆によって語られるタイマツや観音堂のエピソードでも、聞き手が絶対枠による問いを発しない限り、ことばによる絶対枠の表現がなされることはまれである(細馬 準備中)。

しかし、このことは、この祭りに方位感覚が欠けていることを意味するのではない。むしろ逆に、「観音様の祭り」は、ここに挙げたタイマツの位置をはじめ、ひとつひとつの舞いの向き、笛や太鼓の奏されるガクドウの向きなどが厳格に決められており、また「おこない」をはじめとする数々の儀式では、人や事物の配置、時間的順序が細かく取り決められている。

これらの事物の位置や向きのひとつひとつは、「東西南北」で言い表されるのではない。事物は、他の事物とともにその名を発語される。そしてその発語に伴うジェスチャーが他の事物との空間関係を表現することによって、参照枠が構成され、事物の位置や向きが明らかになるのである。

ここで取り上げた別当のジェスチャーでは、ことばで示

された儀礼の空間配置が的確に示されているばかりでなく、ことばで明示化されない儀礼までが空間的に表現され、さらにそこには、事物の東西南北情報も含まれていた。

「聞き取り」調査が、言語を「聞く」記述に終始するならば、こうした身体表現の持つ意味はもれてしまう。しかし、そこに伴うジェスチャーに注目するならば、語り手の持っている身体の知が持つ豊かさに、アクセスすることができるのである。

6. 謝辞

聞き取り調査にご協力いただいた高木虎男氏をはじめ、祭りに関する貴重なエピソードを話していただいた西浦田楽の能衆の方々に感謝します。

7. 参考文献

- Haviland, J. B. (1993). Anchoring and iconicity in Guugu Yimithir pointing gestures. *Journal of Linguistic Anthropology* 3(1), 3-45.
- Haviland, J. B. (2000). Pointing, gesture spaces, and mental maps. In D. McNeill (Ed.), *Language and gesture*, (pp.13-46). Cambridge University Press.
- 開一夫、松井孝雄 (2001). 空間認知と参照枠. 乾敏郎・安西祐一郎(編), イメージと認知 認知科学の新展開 4. (pp.55-79). 岩波書店
- 細馬宏通. (2002). 思考を漏らす身体 —ことばとジェスチャーの参照枠問題—. 『相互行為の民族誌的記述 —社会的文脈・認知過程・規則』科学研究費基盤研究 (B) (1) (11410086) 報告書. (pp.149-162).
- 井上京子(1998). もし「右」や「左」がなかったら. 大修館書店
- 喜多壮太郎. (2002). ジェスチャー 考えるからだ. 金子書房
- Levinson, S.C. (1994). Vision, shape, and linguistic description: Tzeltal body-part terminology and object description. *Special volume of Linguistics*, 32(4), 791-856.
- Levinson, S.C. (1996). Frames of reference and Molyneux's question: crosslinguistic evidence. In P. Bloom *et al.* (Eds.), *Language and space*, (pp.109-169). Cambridge, MA: MIT Press.

連絡先 細馬宏通 〒522-8533 彦根市八坂 2500 滋賀県立大学人間文化学部 hosoma@shc.usp.ac.jp